

臨床看護学

1 構成員

	平成17年3月31日現在
教授	2人
助教授	2人
講師（うち病院籍）	5人（0人）
助手（うち病院籍）	7人（0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	8人（0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	0人
合 計	24人

2 教官の異動状況

島田三恵子（教授）	（H10.4.9～H17.3.31）
野澤 明子（教授）	（H13.8.1～現職）
大見サキエ（助教授）	（H16.4.1～現職）
片岡 純（助教授）	（H16.4.1～現職）
堀 妙子（講師）	（H13.8.1～H17.3.31）
白尾久美子（講師）	（H14.4.1～現職）
安田 孝子（講師）	（H16.4.1～現職）
青木由美恵（講師）	（H16.4.1～現職）
永井 道子（講師）	（H16.10.1～現職）
佐藤 直美（助手）	（H9.8.1～現職，H16.10.2～産休・育休）
宮城島恭子（助手）	（H14.4.1～現職）
久保 正子（助手）	（H14.4.1～H17.3.31）
村上 静子（助手）	（H13.4.1～現職）
安藤千英子（助手）	（H15.4.1～現職）
杉山 琴美（助手）	（H16.4.1～現職）
足立 智美（助手）	（H16.4.1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成16年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	3編 （ 2編）
そのインパクトファクターの合計	2.65
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	8編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0編 （ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	1編 （ 1編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編 （ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ, 浅野香代子：看護者に対する患者の自己開示－看護者の認識－, Quality Nursing, 10 (12), 81-88, 2004.

インパクトファクターの小計 [0]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Nakamura R, Kataoka H, Sato N, et al：EPHA2/EFNA1 expression in human gastric cancer. Cancer Sci, 96, 42-47, 2005.

インパクトファクターの小計 [2.65]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 稲勝理恵, 野澤明子, 大沢 功, 村上静子, 佐藤祐造：心筋梗塞発症後の回復期における非監視型運動療法の現状と課題, 心臓リハビリテーション, 9 (1), 191-196, 2004

インパクトファクターの小計 [0]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ, 浅野香代子：患者に対する看護者の自己開示-看護者の認識, 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, 第5号, 1-9, 2004.
2. 大見サキエ, 若林慎一郎：看護における自己開示研究の動向と課題, 金城学院大学消費生活科学研究所紀要, 9 (1), 41-52, 2004.
3. 永井道子, 荒木田美香子, 安梅勅江：小・中学生の親を対象にした心理教育的介入の効果, 日本保健福祉学会誌, 11 (1), 79-87, 2005.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 川出富貴子, 鍵小野美和, 大見サキエ, 岩瀬貴美子：子どもにとっての老人の役割－子ども

と老人のふれあいに関わる保育士のグループインタビュー分析から－，愛知医科大学看護学部紀要，第3号，33-40，2004.

2. 高野順子，坂上明子，坂本真理子，白井裕子，佐々木裕子，山本葉奈，金子宏，渡邊智子，大見サキエ，金田綾子，大川能子：健康な地域開発を目指すヘルスプロモーション看護実践－養育期・教育期の家族支援を通して－，愛知医科大学看護学部紀要第3号，41-48，2004.
3. 石久保雪江，岩田浩子，野澤明子：認定看護師の専門的実践能力に関する検討，日本看護科学学会，24（3），81-87，2004.
4. 大西みさ，山口桂子，片岡純：在宅酸素療法患者の受容過程，日本看護研究学会雑誌，27（5），39-48，2004.
5. 小林尚司，白尾久美子，水谷聖子，稲勝理恵：新人看護師の就職後1年間の様相，日本赤十字豊田看護大学紀要，第1号，2005.

(4) 著 書

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1. 柳川洋，萱場一則，青木由美恵，植田紀美子，武田康久，神田晃，若林チヒロ，尾島俊之，服部真理子，黒沢洋一，土井由利子，三浦克之，上原里程，谷原真一（翻訳）：しっかり学ぶ基礎からの疫学 Basic Learning and Training, pp.21-32, 南山堂, 2004. William Anton Oleckno : Essential Epidemiology : Principles and Applications, Waveland Press, Illinois, 2002.

4 特許等の出願状況

	平成16年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5 医学研究費取得状況

	平成16年度
(1) 文部科学省科学研究費	4件 (440万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	1件 (200万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0件 (0万円)

(1) 文部科学省科学研究費

1. 島田三恵子（代表者）基盤研究（B）妊娠中から産褥期の母親の生活リズム等が母子の健康に及ぼす影響に関する研究，240万円（新規）
2. 堀妙子，宮城島恭子（分担者）基盤研究（C）在宅療養児の包括的看護の確立にむけたコーディネーター育成プログラムの開発，代表者 名古屋大学医学部保健学科 奈良間美保，100万円（継続）

3. 佐藤 直美（代表者）若手研究（B）遺伝子診療部における看護実践基準についての検討，50万円（継続）
4. 白尾久美子（代表者）基盤研究（C）(2) 新人看護婦（士）が修得する臨床看護実践能力に関する研究，50万円（継続）

(4) 財団助成金

1. 佐藤 直美（分担者）喫煙科学研究財団 ニコチン依存の形成に関与する要因の研究 遺伝子多型の影響について，代表者 病理学第一講座 相村春彦，200万円（継続）

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	0件
(3) 学会座長回数	0件	3件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	6件
(6) 一般演題発表数	1件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

1. Aoki Y：Reflections on empowerment of a person with dementia. 20th International Conference of Alzheimer's Disease International, October 2004, Kyoto (Japan)

(2) 国内学会の開催・参加

4) 座長をした学会名

- 野澤 明子 第6回日本看護医療学会学術集会，京都市，2004年9月
 白尾久美子 第30回日本看護研究学会学術集会，埼玉市，2004年7月
 白尾久美子 第9回日本看護研究学会東海地方会，豊田市，2005年3月

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

- 島田三恵子 日本看護科学学会 専任査読委員
 島田三恵子 日本助産学会 学術振興委員
 島田三恵子 静岡母性衛生学会 理事
 大見サキエ 日本看護医療学会 専任査読委員
 野澤 明子 日本糖尿病教育・看護学会 専任査読委員
 白尾久美子 日本看護研究学会 評議委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

9 共同研究の実施状況

	平成16年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	7件
(3) 学内共同研究	0件

(2) 国内共同研究

1. 奈良間美保（名古屋大学）、堀妙子、宮城島恭子、田中千代（北里大学）、在宅療養児の包括的看護の確立にむけたコーディネーター育成プログラムの開発
2. 大見サキエ、川出富貴子（愛知医科大学）、子どもと老人のふれあい場面創出に関する研究
3. 大見サキエ、岩瀬貴美子（愛知医科大学）、看護学生の小児病棟でのボランティア活動に関する基礎的研究
4. 大見サキエ、須場今朝子（愛知県厚生連安城更生病院）、がんの子どもと家族に対する教育支援のための連携システム開発に関する研究
5. 佐藤直美、相村春彦（病理学第一）、松井隆（天竜病院内科）、ニコチン依存の形成に關与する要因の研究 遺伝子多型の影響について
6. 佐藤直美、野澤明子、相村春彦、新村和也、名倉聖子（病理学第一）、谷岡書彦（磐田市立総合病院臨床検査科）、吉田輝彦（国立がんセンター研究所腫瘍ゲノム解析・情報研究部）、生活習慣とがんの罹患に関する疫学研究
7. 白尾久美子、野澤明子、水谷聖子（日本赤十字豊田看護大学）、小林尚司（日本赤十字豊田看護大学）、稲勝理恵（静岡県立大学）、新人看護師の臨床看護実践能力に関する研究

10 産学共同研究

	平成16年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 在宅療養児の包括的看護の確立にむけたコーディネーター育成プログラムの開発

前年度に引き続き、小児在宅療養コーディネーター研修会を開催し、計5回のうち後半の3回を実施した。研修会は、小児と家族の包括的支援、専門職の連携と社会資源の活用、ケア・システム評価の能力向上を目標に、少人数による継続学習を行うものであり、後半3回は事例検討と講演を行った。13名の看護師が継続参加し事例発表を行い、各回とも病棟・外来看護師、保健師、訪問看護師、医師、看護系教員等の多数参加により活発な意見交換、研修生への助言等が行われた。研修生として5回継続参加した13名の看護師に、研修会前、2回の研修会終了後、5回の研修終了後に、小児と家族の支援の理解・実施、専門職連携と社会資源の活用の理解・実施、看護場面での

取り組み・気持ち、看護師の役割に関する考え、看護への取り組み、周囲の役割期待、小児・家族の反応を自記式質問紙で調査した。看護師の役割に関する考え、医師など周囲の役割期待、小児・家族の反応に肯定的な変化が生じており、研修会の効果が明らかになった。

(奈良間美保¹、堀妙子、宮城島恭子、田中千代²)¹名古屋大学 ²北里大学

2. 学生自己評価から見た本学における看護基本技術の修得状況について

看護基本技術の学習は、看護基礎教育における重要な要素である。しかし、学士課程における技術の修得状況は、十分には明らかにされていない。そこで、看護基本技術学習項目に関する学生の自己評価を調査することにより、技術に関する修得状況の実態を明らかにし、それを基礎資料として今後の教育の充実を検討していく予定である。

(安藤千英子、野澤明子、片岡純、白尾久美子、佐藤直美、村上静子、杉山琴美)

3. 遺伝子診療部における看護実践基準についての検討

遺伝子診療部の診療へ参加しながら、その中でのクライアントの反応や終了後の面接を通して、遺伝子診療部における看護実践の要素を明らかにしその基準を検討することを目的としている。これまで7組の遺伝子診療部への受診に同席し、診療を通しクライアントの理解や心理的状況の把握に努め特記すべきことについては記録を行った。また、3組のクライアントに診療が終了している時点での面接を行った。今後も引き続き遺伝子診療部への診療参加と終了後の面接、それらの質的な分析を行う予定である。

(佐藤直美、野澤明子)

4. 生活習慣とがんの罹患に関する疫学研究

個人の遺伝的素因は生活習慣とともにがんの罹患性に影響を与える。症例対象研究デザインを用いたCommon Cancer の関連遺伝子多型と臨床情報・生活情報の解析により、がんの罹患に関する宿主・環境相互作用を明らかにすることを目的としている。地域総合病院外来にて65歳以上の外来患者で研究の内容等について文書で同意の得られた方を対象に血液の採取・既往歴、生活情報などの聴取を行っている。これまで約1,000例のデータを収集した。引き続きデータ収集を行い遺伝子解析を開始する予定である。

(佐藤直美、野澤明子、相村春彦、新村和也、名倉聖子、谷岡書彦、吉田輝彦)

5. ニコチン依存の形成に関する要因の研究

ニコチン依存をはじめとする喫煙行動に対する遺伝子多型の影響について明らかにするために、ドーパミンD2受容体 (DRD2) 遺伝子について、男性389名、女性204名、計593名の喫煙行動に関する調査結果と遺伝子解析の結果について統計学的分析を行った。DRD2遺伝子のTaq I Aの3つの多型と喫煙状況の分布について男性のみに有意な結果が見られた。ニコチン依存度をはかる質問紙であるFTNDの遺伝子型による差や喫煙状況による差は見られなかった。男性における、A1A1を基準とした、A1A2、A2A2の現在喫煙者の年齢調整オッズ比が「過去および非喫煙者」「過去喫煙者」を対照としたとき有意に高かった。以上のことから喫煙状況に対するDRD2遺伝子Taq I A

多型の影響が見られ、特に現在も喫煙をしている場合にA2 allele が関与している可能性が示唆された。

(佐藤直美, 野澤明子, 相村春彦, 松井隆)

6. リフレクションに関する研究

リフレクションは、看護実践を通じて専門職としての認識力を高めて、感情や行動の領域と共に認知領域の発展を支え、看護師が自ら一生涯学び続けていくのに適したものであるといわれている。これまで段階的にリフレクションに関する研究を進め、今年度、認知症高齢者看護に関するリフレクションの展開からは、認知症高齢者のエンパワーメントを支援する援助についての示唆を得た。

(青木由美恵)

7. 小・中学生の親を対象にした心理教育的介入の効果

小・中学生の親を対象に、心理教育的介入を行い、介入の前後で評価尺度の数値を比較することにより、効果を検証した。その結果、精神健康度、身体的症状及びうつ傾向が有意に改善し、自尊感情は有意に上昇した。また、子どもの成長に関する満足度及び理解度は、有意に高くなっていた。また、子どもの気持ちを今以上に理解したいとより強く思うようになる傾向があった。

(永井道子, 荒木田美香子¹, 安梅勅江)¹大阪大学

8. 新人看護師の臨床看護実践能力に関する研究

新人看護師の職場適応へのサポートを目的に、本年度は適応状況に関する調査を実施した。就職後12ヶ月にあたる3月に、新人看護師834名を対象に質問紙調査を実施した。結果、就職後の新人看護師は、「仕事に対する志向」、「看護師としての自己評価」の2つの要素が抽出された。その2つの要素は、ストレス反応に対する影響要因であることが明らかとなった。

(白尾久美子, 野澤明子, 水谷聖子¹, 小林尚司¹, 稲勝理恵²,) ¹日本赤十字豊田愛知看護大学,
²静岡県立大学看護学部研究科

14 研究の独創性, 国際性, 継続性, 応用性

1. 在宅療養児の包括的看護の確立にむけたコーディネーター育成プログラムの開発

本研究は、在宅ケアを必要とする小児と家族に包括的看護を実践する看護師の育成に向けて、「小児在宅ケアコーディネーター研修会」を開催し、その効果を明らかにすることを目的としている。この研究によって、看護師の能力開発の方策を検討し、ケアの質の向上を図ると共に、未だ十分には整備されていない小児在宅ケアの支援体制の充実を図ることを目指している。平成15年～16年の5回シリーズの研修会を終え、1期の修了生を出し、平成17年度は4回シリーズの第2期の研修会を開催する予定であり、これまでの成果と課題を反映させていく予定である。また、研修会の修了生にも継続参加を呼びかけその後の看護へ生かしているかを確認していく予定である。

(堀妙子, 宮城島恭子)